

# 特別支援学校学習指導要領解説の発達の検討 No. 3

～ 算数その1～

Developmental Study of investigation No 3 of the contents “Commentary to National Curriculum Standards special needs school course”

～ Arithmetic Part 1～

稲 富 眞 彦\*

## Abstract

I examined Special support school course of study arithmetic from a developmental viewpoint. As a result, I was able to point out the following things.

The arithmetic is relatively systematic in a comparison with national language. However, consistency with national language is not considered. In addition, one phase and before one phase think that examination letting you become independent as a subject of arithmetic and national language is necessary.

There is not explanation about not taking up in front of one phase of contents by the course of study commentary.

There are the leap in the stage, the leap between stages by the course of study commentary. I include different stages of development of the quality by the course of study commentary at the contents stage. Therefore different learning content of the quality of the development is set.

Number “1” learning. Examination about a Binary concept (“two world”), the self development is demanded.

キーワード：特別支援学校学習指導要領解説、自立活動、発達、障害

## 1 研究の目的

### 1-1 これまでの検討結果の概要

これまで特別支援学校学習指導要領及び同解説、自立活動編を国語教科について検討を行ってきた。検討した結果について以下に概略を示す。

- ①特別支援学校学習指導要領「各教科」領域解説と「自立活動」領域解説の基本的内容の整合性が図られていない。
- ②学習指導要領内容の「読む」「書く」について1段階と2段階には飛躍がある。
- ③学習指導要領解説、特に「読む」内容1段階と2段階の飛躍がみられる。  
「読む」内容について、1段階の内容である「教師と一緒に絵本などを楽しむ」と2段階の内容、「文字などに関心をもち、読もうとする」の間に

は課題内容に大きな飛躍がある。

- ④「書く」内容1段階のていねいな内容の提示の必要性がある。また2段階内容の飛躍がある。ここでは「読む」内容の段階間と同様に1段階と2段階の発達課題の飛躍が指摘することができる。
- ⑤「自立活動」領域において社会的微笑の獲得や話し言葉獲得の内容が十分ではない。
- ⑥自立活動の障害種の特徴記述の系統性及び例示について発達研究の成果に基づく検討が必要である。
- ⑦自立活動領域解説具体的内容における障害例示数の偏りがみられる。  
取り上げられた障害について障害の程度、発達との関連などの指摘は不十分である。今後、学習指導要領の解説として何らかの方針のもとと系統的な障害例示を示すことが求められる。

\* Masahiko INATOMI 教授

## 1-2 数「1」獲得と量の発達に関する仮説

数「1」の獲得は始め（初め）の数であり、算数という教科では重要な意味をもつ。

数学者岡潔は子どもが生後どの時期に「1」を認識するのかという孫の観察で18か月ころであったとする。「1」の認識は、世界を対象とすることであり、全体・宇宙の発見であると述べる。

ピアジェが感覚運動的知能の段階において外界が「見え」から「存在」の世界に変化することを話し言葉獲得の前提とすることと通じる。そのためには眼の前の対象が見えなくなってもその対象は存在しているという「対象概念」の認識発達が必要である。

外界を自己と切り離して認識することが「1」という数の獲得には必要であろう。18か月ころ、乳児から幼児への発達の大きな飛躍は、二足歩行の確立があり、道具を使用する手指の機能性が確立され、また表出・受容の話し言葉が獲得されてくる。

しかし、外界が存在している世界という認識は数概念のスタートとなるであろうが、未だ数「1」が認識されたことを意味しない。それは直接に外界の存在が認識できるようになったという意味（名詞）においてであり、限界がある。

同一の対象において「大小」「長短」「色」等があり（形容詞）、視覚という感覚以外にも「重い・軽い」「濡れる」「やわらかい」「おいしい」「うるさい」「匂う・臭う」「早い・速い」など触覚・味覚・聴覚・臭覚などを通して世界の認識は広がりをもってくる。

また、「きれい」「かわいい」など子どもの育つ文化の影響による比較の認識も形成されてくる。

そうした認識は絶対的ではなく相対的なものであるが、その相対性の基準はその認識する存在・「自我」の中にある。すなわち、「自我」という育ちの中で対になった関係を比較・価値づけていくことができるのではないかと考える。

一方、確固たる「1」という認識が存在するためには「2」という複数の数が認識され始めて真の「1」という数認識ができるのではないだろうか。

そのように整理していくと「1」という数認識は、2歳半ばころに確立してくると思われる。つまり「大小」比較認識ができ、自我が誕生する時期である。また、より確固たる「1」認識は対の概念がゆたかさ・広がりを見せる3歳前半ころと思われる。

話し言葉の獲得が遅滞する子どもや自閉症スペク

ラムの子どもにおいては「大小」比較認識の遅れが臨床的に認められる。また、典型的な自閉症においては「大小」比較認識は生涯をかけた課題になる。

すなわち、数概念は話し言葉獲得、「自我」の形成と密接に関連するのではないかと考えられる。

こうしたことから「数」に関連する指導が通常の小学校算数教科の「水増し学習」である限り学習効果は期待できない。「数」は対の概念、2つの世界、形容詞や副詞など「飾る」言葉に関係する体験において獲得される。実物を見ながら、体験しながら心を揺さぶり・揺さぶられ、自ら育ち（自我形成）のなかで獲得されていくことになるであろう。

## 1-3 本研究の目的

算数の教科指導は学習指導要領解説にも触れてあるように「・・・ともすると形式的な計算で終わる」ことが多い。また、算数を独立した教科として取り扱わない場合の実務的指導では系統的な指導になっていないことが多い。今回の報告では特別支援学校学習指導要領算数教科の4つの観点（補表）のうち2つについて発達の視点から検討を行う。

特に注目するのは特別支援学校学習指導要領解説において、

「数の1の認識がいつごろから誕生するのか」

「大小などの量の認識」

「体験的な算数から教科的な算数指導への移行」

についての記述である。

## 2 方法

「各教科」のうち小学部算数教科に限定する。算数教科の目標は「具体的な操作などの活動を通して、数量や図形などに関する初歩的なことを理解し、それらを扱う能力と態度を育てる。」とされる。内容構成の考え方で内容は、「数量の基礎、数と計算」「量と測定」「図形・数量関係」「実務」の4つの観点から構成されている。今回は、この4つの観点のうち「数量の基礎、数と計算」「量と測定」を検討する。「自立活動」領域については今回の検討では行わない。

まず小学部算数に示されている内容と段階について発達に関する田中昌人、ピアジェらの先行研究と照らして算数教科解説の内容について検討を行う。

また、特別支援学校学習指導要領解説における算数教科解説の記述のうち新版K式発達検査2001の

補表 特別支援学校学習指導要領解説における算数教科の記述

<p><b>算 数</b></p> <p><b>1. 算数科の意義</b></p> <p>算数科については、手や身体を使った体験的な活動を通して、日常生活に必要な数量や図形に関する初歩的なことを理解し、それらを個々の生活場面で取り扱う能力と態度を育てることを目標としていることが特徴である。</p> <p>算数科の内容としては、「数量の基礎及び数と計算」、「量と測定」、「図形・数量関係」、「実務」から構成される。</p> <p>小学部の段階においては、児童が具体的な生活や活動を通して直接的に経験を広げたり、その経験を深めたりするようにし、できるだけ児童の数量的な感覚を豊かにすることが大切である。</p> <p>数量的な感覚を豊かにしたり、実際の数量に関する力を伸ばしたりするためには、生活の中で数量にかかわる具体的な活動などに重点を置き、児童自らが興味・関心をもち、その必要性を感じるような適切な課題設定や教材を用いた学習活動を展開することが必要である。</p> <p><b>2. 改訂の要点</b></p> <p>児童の知的障害の状態等を踏まえ、1段階について、より初歩的、具体的な指導内容が設定できるようにする視点から内容を改めた。</p> <p><b>3. 目標（第2章第1節第2款第1【算数】）</b></p> <p><b>1 目標</b></p> <p>具体的な操作などの活動を通して、数量や図形などに関する初歩的なことを理解し、それらを扱う能力と態度を育てる。</p> <p>(1) 目標は、従前どおりである。</p> <p>(2) 目標は、3つの内容で構成されている。</p> <p>①「具体的な操作などの活動を通して、」とは、具体物を見たり、手で触れたり、体を動かして順番に並んだり、一定の数の音を聞いたりするなどの活動のことである。</p> <p>②「数量や図形などに関する初歩的なことを理解し、」とは、数、量、計算、図や形、位置関係のほか、時計や暦などについての、初歩的な事柄を理解することである。</p> <p>③「それらを扱う能力と態度を育てる。」とは、数量、図形などに関する初歩的な学習内容を日常生活の中で実際に活用することができるようにしたり、実際に使おうとしたりする意識を育てることである。</p> <p><b>4. 内容（第2章第1節第2款第1【算数】）</b></p> <p>(1) 内容構成の考え方</p> <p>内容は「数量の基礎、数と計算」、「量と測定」、「図形・数量関係」、「実務」の4つの観点から示している。</p> <p><b>「数量の基礎、数と計算」</b></p> <p>1段階（1）具体物があることが分かり、見分けたり、分類したりする。</p> <p>2段階（1）身近にある具体物を数える。</p> <p>3段階（1）初歩的な数の概念を理解し、簡単な計算をする。</p> <p>①各段階の内容（1）は、1段階では「数量の基礎」、2段階及び3段階では「数と計算」の観点から示している。</p> <p>今回の改訂では、1段階（1）について、従前の「具体物の有無が分かる。」を、児童の知的障害の状態等に即し、その内容が分かりやすく、具体的な学習活動を設定しやすいよう「具体物があることが分かり、見分けたり、分類したりする。」と改めた。</p> <p>2段階（1）及び3段階（1）は、従前どおりである。</p> <p><b>「量と測定」</b></p> <p>1段階（2）身近にあるものの大小や多少などに関心をもつ。</p> <p>2段階（2）身近にあるものの長さやかさなどを比較する。</p> <p>3段階（2）身近にあるものの重さや広さなどが分かり、比較する。</p> <p>①各段階の内容（2）は、「量と測定」の観点から示している。</p> <p>今回の改訂では、1段階（2）について、従前の「身近にあるものの数量に関心をもつ。」の「数量」を、2段階（2）の内容を考慮するとともに、より具体的な指導内容を設定できるよう「大小や多少など」と改めた。</p> <p>2段階（2）及び3段階（2）は、従前どおりである。</p>
--

下位項目と内容が一致する場合、下位項目の通過年齢を参考とする。

分析は内容の3つの段階ごとに解説で説明されている Key Concept を中心に検討する。

### 3 結果

結果は各内容の段階ごとに「特別支援学校学習指導要領解説における説明」「説明の中での注目する記述部分」「発達の検討」の欄を設けて示す。

結果を Table-1 から Table-6 の6つに分けて示す。

## 3-1 「数量の基礎、数と計算」

Table-1 「数量の基礎、数と計算」

1段階（1）具体物があることが分かり、見分けたり、分類したりする。

特別支援学校学習指導要領解説における説明	説明の中での注目する記述部分	発達の検討
「具体物があることが分かり、」とは、具体物を指差したり、つかもうとしたり、隠されたものを探したりするなど、具体物を対象としてとらえることができることであり、「見分け」には「個別化する」を、「分類」には「類別する」、「分類・整理する」、「対応する」を含んでいる		
「具体物があることが分かり、」とは、具体物を指差したり、つかもうとしたり、隠されたものを探したりするなど、具体物を対象としてとらえることができることであり、「見分け」には「個別化する」を、「分類」には「類別する」、「分類・整理する」、「対応する」を含んでいる	A「具体物を指差し」 B「つかもうとしたり」 C「隠されたものを探したり」 3つの発達特徴の並列的説明	指さし…12か月から15か月 把握…6か月 対象概念（ピアジェ）…12か月から15か月 明らかにBの発達の質が異なる
「個別化する」とは、例えば、目の前で隠されたものを探したり、身近にあるものや人の名を聞いて指差したりすることなど、特定のものに着目することである。	「目の前で隠されたものを探したり」 「ものや人の名を聞いて指差し」	対象概念（ピアジェ）…12か月から15か月 「可逆の指さし」…18か月
「類別する」とは、形や色が同じものを選ぶこと（例えば、同じ色の積み木やボールをとる）、似ている2つのものを結び付けること（例えば、果物についての仲間集め）などである。ここでは、様々な刺激のうちから、必要な情報のみを取り出し、他を捨棄することが重要である。	「形や色が同じものを選ぶ」 「似ている2つのものを結び付ける」	ものや人の名称という「名詞」から「必要な情報のみを取り出し、他を捨棄すること」ことは次の質の発達段階（「飾る言葉」「形容詞」）への移行が必要となる 2歳6か月～3歳
「分類・整理する」とは、関連の深い一対のものごとの組合せ（例えば、いろいろなスリッパを対にしてそろえること）や同じものごとの仲間集め（例えば、食事の時間に皿は皿、スプーンはスプーンに分けて片付けるなど）などのほか、ほかの種類や質の違いがある対象を含めた集合づくりをすることである。	「関連の深い一対のものごとの組合せ」 「同じものごとの仲間集め」 「ほかの種類や質の違いがある対象を含めた集合づくり」	1歳6か月～2歳6か月 形や色などの種類や質…2歳6か月以降
「対応する」とは、例えば、盆や皿などを一人に1つずつ配ることなどである。また、具体物からの発展としては、分割した絵カードの組合せ（例えば、分割した自動車の絵を完成すること）、関連の深い絵カードの組合せ（例えば、キリンとゾウ、ミカンとバナナなどの絵カードを組み合わせる）ことなど、半具体物を使用した初歩的な分析と総合が挙げられる。	A「分割した絵カードの組合せ」 B「関連の深い絵カードの組合せ」 「半具体物を使用した初歩的な分析と総合」	簡単なパズル（20前後のピース）…1歳6か月～2歳6か月 動物や果物…4歳から5、6歳 AとBは同列ではなく発達の質が異ってくる
指導では、教具を使ったり、具体物を操作したりすることなどに興味をもち、自分の手足や身体を使って活動できるようにするために、教師が大きな動作を加えて賞賛したり、正しく操作できたら音や光が出る教具を用いたりするなど、確実に児童の感覚を活用することが重要である。	「教具を使ったり、具体物を操作」 「自分の手足や身体を使って活動」 「児童の感覚を活用すること」	1段階は基本的に1歳代から2歳半ばの発達レベルが想定されており、机上での学習ではなく身体や感覚を使っている活動

Table-2 「数量の基礎、数と計算」

2段階（1）身近にある具体物を数える。

特別支援学校学習指導要領解説における説明	説明の中での注目する記述部分	発達の検討
「身近にある具体物を数える。」は、「数を数える」、「一対一対応をする」	「分類する」などの内容が挙げられる。	
「数を数える」では、1～10の範囲で、1つずつ数詞を獲得していくことを指導する。その際、手を触れたり、動かしたり、両手で囲ったりしながら正確に対応させていくことが大切である（例えば、積み木などを積んで数を数えたり、比べて多い少ないが分かること）。	「1つずつ数詞を獲得していく」 「正確に対応させていくこと」	数を数える・指で押さえる…2つの操作を同時に行う 5つ…3歳6か月 13…4歳6か月
また、順序数をとえたり、数字を読み書きしたりするなどの数詞の活用を、日常生活経験の中で繰り返し学習することが大切である。	「順序数をとえたり」 「数字を読み書き」	いくつまでの順序数かが不明 6歳
集合数の理解は、具体的な事物を加えたり減らしたりすることなどの活動（例えば、5までの数で、合わせて幾つ、幾つと幾つに分けられるなどを具体物や積み木に置き換えて理解すること）を経て、加法・減法の基礎理解につながる重要な指導内容である。	「具体的な事物を加えたり減らしたりする」	5までの加減…5歳半ば～6歳
「一対一対応をする」では、数の多少が分かり、多い方（少ない方）を指すことを指導する。例えば、給食の配膳やプリント配布などの生活場面において「同じ」、「足りない」、「余っている」の確かめを確実にすることなどである。	「数の多少が分かり、多い方（少ない方）を指す」 「『同じ』、『足りない』、『余っている』の確かめ」	4歳 5歳～6歳
「分類する」では、1段階の指導を踏まえて、形、色、大きさに加え用途や目的、機能等に注目することが大切である。	「形、色、大きさに加え用途や目的、機能等に注目する」	3次元的操作…6、7歳

Table-3 「数量の基礎、数と計算」

3段階（1）初歩的な数の概念を理解し、簡単な計算をする。

特別支援学校学習指導要領解説における説明	説明の中での注目する記述部分	発達の検討
「初歩的な数の概念を理解し、簡単な計算をする。」のうち、「初歩的な数の概念を理解し。」とは、2位数程度の数の意味の理解を指し、内容は「数唱」、「計数」、「記数」、「大小比較」、「順序数」、「合成・分解」などである。		
「数唱」とは、数を言葉で言うこと、「計数」とは、具体物と数詞を一対一対応すること、「記数」とは、数字を書くこと、「大小比較」とは、例えば、さいころ遊びや玉入れをして数比べをすること、「順序数」とは、例えば、次の数あて、前の数あて、逆の順で数詞を言うことなどである。	「計数」 「記数」 「大小比較」 「順序数」	6, 7歳 6歳 6歳 逆唱…6, 7歳
「合成・分解」とは、例えば、補数関係を中心に「5に幾つ足りない」、「5は4と□」などを取り扱い、この段階では、10までの数を対象とする。数の合成・分解の指導は、数の概念形成の上からも、また、四則計算の操作からも、極めて重要な基礎的学習であり、十分に時間をかけて理解の深まりを図ることが大切である。そのためには、「合わせる」、「分ける」などの言葉の意味を理解するとともに、具体物や半具体物を、合わせたり分けたり児童自らが繰り返して操作することが重要である。	「補数関係」  「数の合成・分解の指導」	6歳  指導についての指摘 他の項目では触れられていない
「計数」においては、10ずつまとめて数えることなどにより、数多くのものを正確に数えたり、位取りの基礎を確実に理解したりできるよう指導する。	「10ずつまとめて数える」 「位取り」	6～7歳
また、具体物を数える場合、品物によって「個」、「本」、「冊」、「枚」などの呼称が変わることを、併せて指導することが大切である。	「記数」	6～7歳
「簡単な計算をする。」については、具体物を用いておおむね10まで（和が10以下の加法及びその逆の減法）の加減算や乗法・除法の意味の理解などを取り扱う。簡単な加法・減法の計算においては、合併（合わせて幾つ）・増加（～を入れると幾つ）、求残（残りは幾つ）・減少（幾つ減った）・求差（幾つ違う）・不足（幾つ足りない）など、日常生活の中でそれを用いる場合や、その意味について指導することが大切である。	「10までの加減算や乗法・除法の意味の理解」 「合併・増加、求残・減少・求差・不足」	6～7歳
また、用語（例えば、合わせて幾つ、みんなで幾つ、残りは幾つ、違いは幾つなど）・記号（+ - =）・式などの理解や筆算の方法を含む計算方法についての指導や、計算技能の向上を図ることも重要である。	「用語・記号・式」	6～7歳
しかし、計算の学習は、ともすると形式的な計算の操作で終わることがある。むしろ、特に活動場面を通じて具体的に指導したり、具体物を使って繰り返し指導したりするなど、計算がそれぞれ用いられる場面で生かされるよう配慮することが大切である。	「計算の学習」	
「乗法」については、2ずつ、5ずつでまとめて数えること（例えば、キャンディを2ずつの集まりに分ける、2・4・6・8・10と数唱する、2ずつまとめて数えると数えやすいことに気付くことなど）、	「乗法」	7～8歳
「除法」では具体物を等分すること（例えば、花が6本ある。2つの花瓶に同じように分けるには、幾つずつに分けるとよいかなど）、半分に分けることなどにより、それらの計算の初歩的な意味を学習することに重点を置いて指導することが大切である。	「除法」	8～9歳

## 3-2 「量と測定」

Table-4 「量と測定」

1段階（2）身近にあるものの大小や多少などに関心をもつ。

特別支援学校学習指導要領解説における説明	説明の中での注目する記述部分	発達の検討
「身近にあるものの大小や多少などに関心をもつ。」とは、量についての基礎的な概念を養い、大きい小さい、多い少ない、重い軽いなどの違いに体験的に気付いたりすることである。砂、水、ボール、積み木、粘土などの素材を使用して、例えば、教師と一緒にいろいろな大きさの砂山を作ったり、水をいろいろな容器に移し替えたり、積み木を積んで高さ比べをするなどの遊びが挙げられる。		
大小、多少などは、比較から生まれる相対的なものであり、特に、1段階では、2つのものの大小、多少を中心に、視覚等の感覚による判断の経験を大切にするとともに、児童が実生活で出会う様々な量やその大きさについて関心をもてるようにしたり、量についての感覚を育てたりすることなどに配慮することが大切である。	「2つのものの大小、多少を中心に、視覚等の感覚による判断の経験」	2歳～2歳6か月

Table-5 「量と測定」

2段階（2）身近にあるものの長さやかさなどを比較する。

特別支援学校学習指導要領解説における説明	説明の中での注目する記述部分	発達の検討
「身近にあるものの長さやかさなど」とは、遊びや生活の中にある具体物についての大きい小さい、多い少ない、長い短い、高い低い、広い狭いなどに関することである。		
「比較する。」とは、この段階では、具体物を感覚的に直接比較して理解することを意味している。例えば、大きい小さいは、ボール、果物、布、紙、食器などの大きさ比べ、多い少ないは、給食の皿に盛り付けられた副菜の量や牛乳びんでの比較など、具体物を通じた指導が挙げられる。長い短いについても、例えば、測定の基礎として一端をそろえるという要素が必要であるが、鉛筆やクレヨン、箸の長さを比べるなどを通して指導することができる。高い低いについては、身長、ジャングルジムや鉄棒などでの高さ比べなどの指導が考えられる。	「具体物を感覚的に直接比較して理解する」  「例えば…」  「測定の基礎として一端をそろえるという要素が必要」	2歳6か月～3歳  例えば以下の具体的な指導例が他の部分と比較して豊富  5、6歳…絵画の基底線
広い狭いについては、児童がとらえやすく、その差の大きいものについて指導することが大切である。例えば、25mプールとビニルプールの広さの比較についてなどである。	「広い狭い」	6歳以降 「大小」「長短」から何故「広さ」なのか？ 「重さ」「美醜」「体積」「太さ」「速さ」などの比較は示されていない 次の3段階では「太い細い、厚い薄い、深い浅い、遠い近い」などの内容の記述がある
2段階（2）では、大小、長短などは、その関係が絶対的なものでなく相対的なものであり、比較するものの対象により変化することを指導する。	「指導」	

Table-6 「量と測定」

3段階（2）身近にあるものの重さや広さなどが分かり、比較する。

特別支援学校学習指導要領解説における説明	説明の中での注目する記述部分	発達の検討
「重さや広さなどが分かり。」とは、重い軽い、広い狭いに加え、対象物の状態や属性の抽出の仕方により使用されることがある太い細い、厚い薄い、深い浅い、遠い近いなどの内容を指している。		
「比較する。」とは、三者や四者の比較において、比較級（例えば、ひもの長さ比べを行い、AよりもBの方が長い、長い順に並べる）、最上級（例えば、Aが一番長い）などの理解や用語を使うことができるようになることである。また、長さを任意の単位（例えば、ロープ、テープ、棒等を使って）で表すことで、間接的にこれより少し長い、これと同じくらいなどと比較判断したり、他に利用する素地を養ったりすることなど、数量を生活に生かすような学習の展開を意味している。ボール投げや幅跳びの結果を例えば1mの棒や10cmのひもを使って比較し、1mや10cmの長さに親しむことなどの経験を豊富にすることにより、長さの感覚を十分身に付けることが大切である。	「2つの比較から系列的」  「長さの指導」  「他に利用する素地を養ったりすること」	3次元可逆操作…6、7歳 自ら絶対的な基準を設定して比較する  具体的な指導例が他の部分と比較して豊富  「素地」用語の意味が不明
この段階の児童の生活では、様々な計器類に触れることも多い。例えば、電気製品や調理用品のメーターの表示が示す数値を読み、その意味を知ることは生活を営む上でも、量の感覚を養う上でも大切なことである。	「計器類」	子どもの身長や体重がより身近で具体的ではないか？

## 4 考察

### 4-1 教科間の整合性

算数教科は国語教科との比較において相対的に系統的であるが、国語教科との教科間の整合性が検討されていない。また1段階及びそれ以前は算数や国語の教科として独立させるかの検討が必要であろう。

### 4-2 1段階前の段階について

内容1段階前について取り上げていない理由が示されていない。

### 4-3 段階内における飛躍、段階間の飛躍

段階内・間において複数の発達の段階を含んでおり発達の質の違う学習内容が設定されている。

### 4-4 他

数の「1」の学習。ゆたかな対の概念（「2つの世界」）についての提示や障害のある児の自我形成と対概念獲得についての検討が求められる。

本研究は第49回日本発達障害学会（ポスター発表2014.8宮城教育大学）で一部を報告した。

### 引用文献

1. 特別支援学校 教育要領・学習指導要領, 文部科学省 2009
2. 特別支援学校学習指導要領解説 総則等編, 文部科学省 2009
3. 特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編, 文部科学省 2009

### 参考文献

1. 稲富真彦:「特別支援学校学習指導要領解説」の発達の検討～国語その1～. 高知大学教育実践研究第27号. 2013
2. 稲富真彦:特別支援学校学習指導要領及び自立活動解説の発達の検討～国語その2～. 教育学論究 2013—第5号— (関西学院大学教育学会). 2013
3. 清水・玉村編『障害児教育の教育課程・方法—改訂版—』培風館 2003
4. 全日本特殊教育研究連盟編『日本の精神薄弱教育—戦後30年— 第2巻 教育の方法』日本文化科学社 1979
5. 窪島務『障害児の教育学』青木教育叢書 1988
6. 田中昌人『人間発達の科学』青木書店 1980
7. 岡潔『岡潔集第3巻』学習研究社 1969
8. ピアジェ『知能の誕生』ミネルヴァ書房 1978